

＜スタッフ紹介＞

役 職	スタッフ名
副病院長兼手術センター長 兼心臓・血管センター長 兼患者サポートセンター長 兼臨床工学・技術センター長 兼国際センター長	船津 俊宏
部 長 兼ICU/CCUセンター長	良本 政章
医 長	山田 翔平
非常勤医員	岩井 駿(10月入職)
非常勤医員	琴谷 美咲(9月退職)

＜特色と概要＞

心臓血管外科では、冠動脈疾患、弁膜症、大動脈瘤、弁膜症合併不整脈、下肢閉塞性動脈硬化症、下肢静脈瘤など、心臓大動脈、末梢血管を中心とした多様な病変に外科治療をおこなっている。近年、心臓血管外科領域も手術の低侵襲化が進んでおり、当科でも積極的に取り組んでいる。弁膜症については僧帽弁疾患、三尖弁疾患、大動脈弁疾患、心房細動、一部の先天性心疾患に対して、完全3D内視鏡下手術、いわゆる低侵襲心臓手術(MICS)を行い、患者の早期回復を実現している。本法では創部が小さくなる(約3cm)ことから整容性や早い社会復帰が主な実施理由であったが、最近は高齢者や呼吸機能低下症例、さらに再手術症例にも適応を拡大し、良好な結果を得ている。冠動脈バイパス術(CABG)についても従来の心拍動下バイパス(OPCAB)に加えて、左小開胸によるMICS-CABGも行っている。胸部及び腹部大動脈に対するステントグラフト内挿術も適応を拡大して積極的に行い、大血管疾患においても症例によっては低侵襲性を実現している。

2025年から開始した高齢者やハイリスク症例に対する大動脈弁経カテーテル的大動脈弁置換術(TAVI)も、循環器内科、麻酔科、看護師、薬剤師、リハビリテーション療法士、臨床工学技士、管理栄養士、医療ソーシャルワーカーなど多職種からなるハートチームの熟成が進み、症例数も増加している。

末梢血管疾患では最近ニーズが拡大してきている静脈瘤患者も増加傾向にあり、当院では根治性を重視して、ストリッピング術を行っている。

重症心不全に対する治療においては、左室補助デバイスであるImpellaを用いた低左心機能症例に対する心臓大血管手術を引き続き積極的に行っており、超ハイリスク症例の救命も実現している。

一方、慢性期の日常臨床においては、かかりつけである地域の先生方と密に連携し(病診連携、病病連携)、シー

ムレスな退院後の全身状態の把握や管理に努めている。

＜実績＞

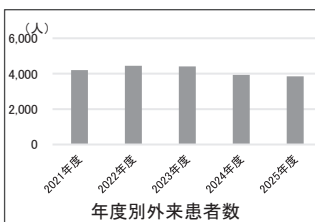
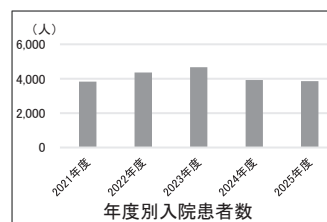
2025年1月～12月におこなった全手術数は213件、開心術112件で、昨年の173件、101件から少し増加した。開心術およびその他の内訳を以下に示す。

冠動脈疾患	15例*
弁膜症	60例*
MICS手術	18例
胸部大動脈瘤(開胸手術)	24例*
急性大動脈解離	6例*
腹部大動脈瘤(開腹手術)	12例
腹部大動脈瘤(ステントグラフト)	10例
末梢血管手術	30例
その他手術	49例

*重複あり

患者数(外来及び入院、延べ人数の推移)

年度	外来		入院	
	延べ患者数	1日平均	延べ患者数	1日平均
2021年度	4,201	17.4	3,830	10.5
2022年度	4,445	18.3	4,358	11.9
2023年度	4,407	18.1	4,666	12.7
2024年度	3,928	16.2	3,926	10.8
2025年度	3,849	15.9	3,856	10.6



＜今年度の成果と来年度への抱負＞

県外からのご紹介もいただき、MICS手術を引き続き積極的に実施し、安定した手術成績を維持していきたい。大血管に対するステントグラフト内挿術も適応を拡大し、より多くの症例で良好な結果を得た。さらにその手術数増加が見込まれる。

論文発表はMICS関連の症例を報告した。学会発表は全国学会中心に10題を報告した。

来年度もMICS手術やステントグラフト治療といった低侵襲な手術を積極的に行うことはもちろん、重症な症例であっても積極的に手術を行い、全領域の手術数を増加させて心臓大血管手術数も150例を目標にしていきたい。練度が上昇してきたTAVIの症例数をさらに増加させて心臓センターとして内科、外科の隔たりなく治療を継続していきたい。学術面では国内学会のみならず、国際学会での発表や論文活動のさらなる充実に努めたい。

